

地歌舞伎

地歌舞伎とは、文字通り「ご当地の歌舞伎」のことで、正式な歌舞伎座以外の地域でアマチュアの役者によって上演されるものである。歌舞伎人気の高まりとともに発展した。

地歌舞伎の広がり

歌舞伎は17世紀に人口の多い地域で生まれた伝統芸能である。色鮮やかな衣装と化粧、演技・舞踊・音楽を組み合わせた劇的な演出で知られる。江戸（現在の東京）、大阪、京都でよく上演された。江戸時代（1603-1867）に人気が広まると、農村でも有名な歌舞伎役者を招いて上演するようになった。こうしたプロの公演と歌舞伎への愛に触発され、多くの小さな地域が独自の劇場を立ち上げ、地歌舞伎が誕生した。町人や農民たちは、他人の舞台を見るよりも、自分たちが舞台に立ちたいと願ったのである。

地歌舞伎の誕生

地歌舞伎は中津川を中心とした東濃地方（岐阜県南東部）に根付いた。中津川には多くの地歌舞伎小屋が建てられ、隆盛を極めた。実際、地歌舞伎の人気は熱狂的なものとなり、徳川幕府は町人や農民の仕事の邪魔にならないようにと、上演を禁止した地域もあった。

強いコミュニティ精神

地歌舞伎は、地域社会が自分たちの文化を祝い、さまざまな役割を担ってショーを行うことで協力し合う。役者、音楽家、舞台係などである。この公演は、

歌舞伎の伝統を守り、さまざまな背景を持つ人々がこのユニークな演劇に参加し、楽しむことを可能にする。

地歌舞伎の重要な部分は、役者と観客の交流である。観客はおひねり（紙に包んだ小銭）を投げたり、役者に声援を送ったりして、エネルギッシュな演技を後押しする。観客と役者が一体となることで、関わる全ての人の共有体験を生み出す。

中津川の地歌舞伎芝居小屋

中津川には現在3つの芝居小屋があり、この珍しい芸能を存続させている。ひとつはかしも明治座。1894年に有志によって建てられたこの芝居小屋は、加子母の小さな農村にある。見学者は地歌舞伎の舞台裏を見学し、大ホールから回り舞台のある地下室まで建物を探検することができる。色とりどりの背景幕は村の女性たちから創設記念として贈られたもので各々の家名が染められている。

現在、日本で地歌舞伎を守り続けている団体は200ほどしかない。そのうちの30団体が岐阜県にあり、岐阜県は全国で最も地歌舞伎が盛んな地域である。

1972年、かしも明治座は岐阜県の重要有形民俗文化財に指定された。